



天草は五つの橋で九州本土と結ばれた

## 第1章 近代化への架け橋

パール・ラインの完成をきっかけに、天草は新しく生まれ変わろうとしている。かつて、日本が黒船の来航によって鎖国から開国、そして明治維新へと発展していったように、天草もいま、開国への大転換を迫られている。離島振興法からの除外も始まった。島外資本が続々と投資され、島内の近代化も進んでいる。

天草五橋が、天草島民自立への、ほんとうの“夢の架け橋”になるかどうか。それは、いまからの私たちの努力にまたねばならないのである。



妙見ヶ浦

## 第2章 天草のなりたちと自然

地球が生まれて46億年。直立猿人がでてから100万年と言われている。長い長い歴史の積み重ねである。

この長い歩みの中で、私たちの郷土天草は、いつのころ、どのようにして形づくられ、先人たちは、どのようにして、この島に住みついたのであろうか。

暖帯林におおわれ、海に囲まれたこの美しい島々を眺めながら、私たちはいま、天草のなりたちを考え、天草の自然についても、生物相の特徴はどんなものかに目を向け、少し探してみよう。



遺跡調査に活躍する学生たち（本渡市妻人鼻墳墓群）

### 第3章 天草の夜あけ

私たちの祖先は、いつごろから、この島に住みついたのだろうか。この疑問に答えてくれるものに、“沖の原遺跡”がある。五和町二江の通詞海岸は、小高い丘の起伏が並び、早崎海峡を隔てて、美しい雲仙の姿を眺めることができる。

山の幸、海の幸に恵まれ、四季を通じて温和な自然の中に、いまから数千年ものむかしの人々の生活があった。



大矢野兄弟の兵船として（蒙古襲来絵詞）

## 第4章 海に生きた先人たち

有史以前から、天草に住みついていた私たちの祖先は、その後、どのような生活を営んできたのだろうか。残念ながら、鎌倉時代に至るまでは、断片的にしか記録が残っていない。武士の時代になっても、やはり天草武士の活躍の舞台は海であった。

室町時代になると、天草でも各地に豪族が割拠し、外に向っては団結して共同行動をとりながら、内では小ぜり合いをくりかえして互に勢力の拡張をはかった。

できたら近くの城跡などを見学して当時の人々の生活をしのんでほしい。

## 第5章 キリシタンとともに

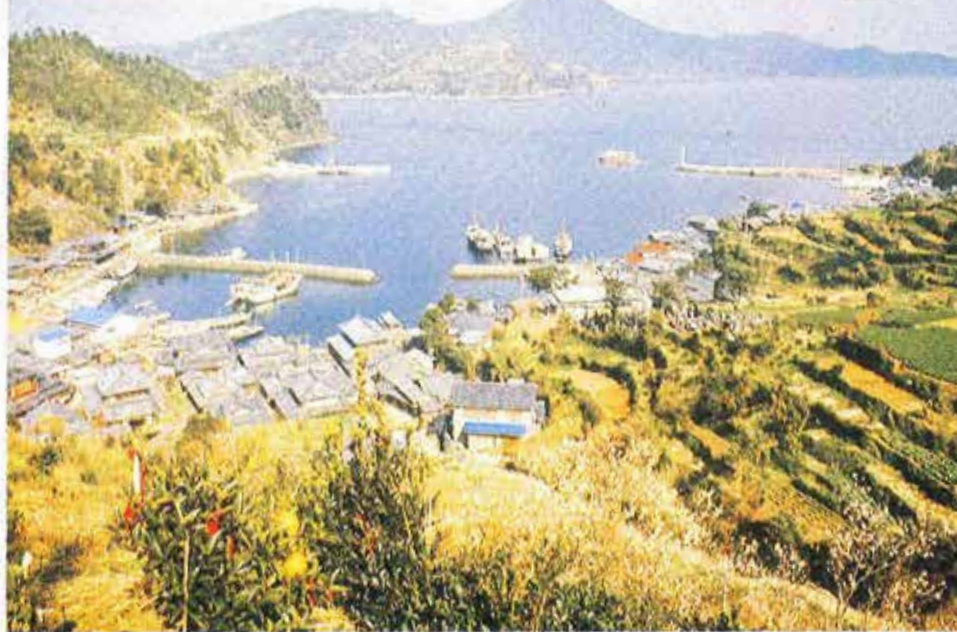
16世紀後半の天草には、キリシタン文化の花が開いていた。私たちと同じ年ごろの少年少女が、アコーディオンに合わせて、賛美歌を歌い、ローマ字の本に目を輝かせていたという。貧しくても、信仰に生きる天草の人々にとって、いちばんすばらしい時代だったに違いない。

しかし、このしあわせも一瞬の夢に過ぎなかった。きびしいキリシタン弾圧や年貢取り立てに抗議してたち上がった島民は、原城跡に1万数千の血を流した。

キリシタンと興亡をともにした私たちの祖先の喜びと悲しみのあとを、たずねてみよう。



天草四郎像 (八代筆)



先祖の汗がにじむだんだん畑（加所浦町）

## 第6章 天領時代の天草

島原・天草の乱後、天草は天領となった。二百数十年の間、天下は太平の世を楽しんだが、天草は貧しい生活と、激増する人口に悩んだ。「耕して天に至る」ということばのとおり、苦しい生活の年輪を、いまま段々畑にうかがい知ることができる。

年貢が払えず、田畑を質に入れ、返済できぬまま銀主に渡してしまうという農民が、他の地方よりも、ずっと多かったといわれる。30回に及ぶ百姓一揆の多くも、銀主に対して、借金の利子引き下げを要求したものであった。



授業風景（教育工学堂）

## 第7章 天草の教育

「むらに 不学の戸なく 家に不学の人なし…」  
と、明治5年(1872)学制の頒布がなされてから100年、天草の教育も幾多の変遷を繰り返しながらも、飛躍的に進歩発展してきた。その間、明治の「富国強兵」、大正の「デモクラシー」、そして、昭和前期の「軍国主義教育」の時代を経て、いま、「平和・民主の教育」を迎えた。

私たちは、先輩たちが踏み固め、たどってきた「教育の道」をもう一度ふり返ってみようではないか。



潮の香ただようふるさと(有明町赤崎)

## 第8章 明治のくらしから

明治・大正のくらしといえは

とろとろと燃える いろり火を囲んで  
語り合う 親子の姿が 浮かんでくる。

学校のできごとを しきりに話す子どもたち

出かせぎの子どもを うわさする母親

あすの仕事に話をはずます父親。

天草弁で語り合う 家族の団らんは

電燈やテレビがなくても

きっと 明るく光り輝いていたに違いない。

いまから 大正初期のくらしを中心に

出かせぎと 天草のことばを考えてみよう。





天草なだの落日

## 第9章 近代文学のふるさと

「彼等は、明治40年8月に天草を旅したのだが、まもなく空太郎は“天草組”と題する一連の華麗な詩を完成し、白秋は“天草雅歌”と題する一連の象徴詩を発表して、絢爛とした処女詩集“邪宗門”の扉を開いたのであった。わけでも、邪宗門は、明治42年以後の近代詩を一新する不朽の名著と称されるにいたったのだが、その詩の源を求むれば、道は自然に、草深く、潮の香の漂う天草に行きつくのである。…」

野田宇太郎「九州文学散歩」より



大漁を祈念して出漁を待つ漁船団 (牛深市)

## 第10章 天草の産業と交通

天草の産業をうたった、むかしの歌に、「小田床茶碗石、志岐の石炭、二江もぐり、高戸の石灰、大矢野砥石」というのがある。平地に恵まれない山がらの地形では、産物といえば、海と山に関係するものであった。

明治以後、政府は殖産興業の面でも力を注ぎ、産業の発展に努めた。それが天草の土地に根をおろすまでには、幾多の苦勞が積み重ねられたことを、私たちは忘れてはならない。



天草マリンスポーツ ヨットレース (有明海)

## 第11章 夢ひろがる郷土天草

昭和41年天草五橋が開通し、九州本土と陸続きになるとそれを契機に産業・経済・文化・観光に大きく影響し天草の発展の足をはやめた。それから30年。高度成長期の中で日本全土に開発のうねりをよび、人びとの生活や気持、求めるものも大きく変わってきた。

天草の3Mと言われる「水・港・道」の問題も少しずつ解決の方向に向かっている。「道」についていえば、平成10年の春には天草空港が開港する予定で、熊本に24分、福岡には42分で飛び結ぶことになる。熊本一天草間に高速道路なみの高規格道路が計画に、鹿児島・天草・長崎の三県を結ぶ連絡道路も調査がはじまった。(平成6年)

外国やほかの地域と早く、広くいききできるようになれば、おたがいの交流も広がり深まることだろう。明るい南国の陽光と美しい自然、豊かな海洋資源、歴史文化遺産が私たちの努力で花開き、「住んで良かった」「行ってみたい」と思える魅力のある島として、虹色の設計図が現実のものになりつつある。大きな未来図を描き、私たちの天草を築いていきたいものだ。